

くは參照地圖のないことである。著者は龍門の石窟については稿を改めて叙述することを期してゐる。それに依つて雲岡龍門兩石窟造營の事情により漢魏晉の文化が北方民族の生新な活力を経て新しい隋唐文化にまで創造せられ行く過程が明らかにされるわけで、其の刊行が期待される。〔四六版、本文一八〇頁、附録一一頁、圖版四葉、富山房發行、定價壹圓貳拾錢〕〔澄田正一〕

岳飛と秦檜 — 主戰論と諍和論 —

支那歴史地理叢書第二

外山 軍治著

新しきものを創造する——新しき題材を取り上げる、それは寔に華々しい。反之、舊きものを見直すことは、なんとジミな仕事であらう。然し新しき創造も、此のジミな舊きものへの反省批判から出發することこそ、總ての場合の正道であらう。

岳飛と秦檜は、人口に膾炙された所謂舊きものである。それは二つの舊きものでなく、正に岳飛あつての秦檜、秦檜あつての岳飛、此の二つのものは相關的な關係に於いて、觀念上一つの舊きものである。

著者外山氏は此の舊きものを、一は誠忠無雙の大英雄、他は陰險邪惡の極惡人といふ常識を、縦から見、横から眺め、上から見下ろして、その常識の由來をも疑視してゐる。我々の東洋史に關する常識は、驚くべきほど稀薄である。しかもその常識たるや、東洋史學の發達せる現今に於いて、なほ且つ徳川時代の舊説を、

或は古き支那人の舊説を、新しく見直すことも無くそのまゝ踏襲してゐるものが少くはない。岳飛と秦檜の場合はその一例である。それは一體誰の罪であらうか。

著者の言に従へば、岳飛の偉さは、宋代軍閥の首領としての偉さで、他の諸將を統率してゆく程の器量を持ちあはせたととは思はれない、と。又、秦檜の結んだ和議と、その成立を計るために採つた術策は致しかたなし、と常識に一矢を放つた。此の結論を導くために、複雑多岐なる宋金の交渉を、その麗筆を以て書き來り説き去つて、その背景を明かにすると共に、二人物の活躍を如實に描いて、正に著者の獨壇場と言ふべきであらう。

本書は支那歴史地理叢書の一である。この叢書が監修者羽田亨博士の序文にもある通り、支那に關する歴史的知識を、特に堅苦しい歴史の學問としてゝなしに、一般的讀物として讀む間に、自づから領得せしめて、時局下に於ける學問奉公をなさんとするのが、その趣旨であるから、本書の行文の平易さと、裝釘のお粗末なこと故に、或は時好に投じた俗書と、同一視されるの恐れなしとしない。然しその然らざ事は、著者の抱負に見るも明かである。自序に、私は宋金兩國の史料によつて、事實しらべを人念にしたその上で、從來、一般には定説として信ぜられてゐる、岳飛と秦檜とに對する判決に異議を申し立てようとする、と。如何に良心的なものであるか、又同時に如何に會心の作であるか推察せられよう。専門史家にとつても、十分讀みごたへのある著書である。又書中の地名に一々現在の地名を比定し、要圖を挿み、年

表を附するなどの親切があり、事件の所々に支那社會の特質を匂はせ、時事問題を引きあひに出すなど素人をも一かどの支那通たらしめねば已まない熱意も、嬉しいもの、一つである。それでもなほ讀みにくいとされる讀者があれば、その罪は一に支那の官名地名人名に歸せらるべきであらう。

題材の舊きが故に、行文の平易なるが故に、装釘の粗末なるが故に、輕視される事なく、史家はもとより、支那の姿を正しく理解せんとする一般人士に、廣く讀まれん事を切望して已まない。(四六判、本文一九〇頁、圖版四、別刷地圖一、昭和十四年十月、富山房發行、定價壹圓貳拾錢)〔堀井一雄〕

龍谷大學三百年史

龍谷大學は眞宗本願寺派の専門道場として最高の教育機關であり、大正十一年大學令によつて昇格し本願寺派の別名とも云ふべき龍谷の文字を用ひて校名となし、佛教學眞宗學の攷究を以つて主なる目的とはするものの、獨外典をも兼學することによつて文科大學としての豊かなる内容を持ちながら、現に京都西六條の土地に宗門はもとより一般子弟の教育に従事してゐる大學である。

蓋し宗門教育の事は一派の基礎を確實ならしむる爲に早くより各宗派に於て試みられて居り、平安時代のはじめ最澄は山家學生式を制定して天台宗學の興隆をはかり、學府としての延暦寺は永く存續して、天文年間我國に來朝せるキリスト教徒の目には「佛教主義の大學」として強く映じて居る。空海が衆藝を兼綜すべし

として開設した綠蔭種智院はその形に於て現に各宗派がその教育機關として經營してゐる多くの宗門大學の先驅をなしてゐる。淨土宗日蓮宗の檀林も亦かゝるものであるが、本願寺のそれは寛永十六年本願寺邸内に創設された學寮を以つて其起源とする。やがて學林と改稱され幕末に及び、明治初年に一般學校の制に倣つて大教校と改組し以後龍谷大學に迄發展し來れる事實よりすれば、昭和十四年が偶々三百年に相當し其紀念事業の一として龍谷大學三百年史と題されて本書が編纂されたのも蓋し當然の事と云はねばならない。

本書の編纂は龍大禿氏・西谷南教授顧問となり西光教授編纂主任となり講師宮崎・普賢兩氏これが執筆に當つた。何れも眞宗學眞宗史の學匠として知られた人々であり、従つて本書はよく同學の沿革を傳へるものとして貴重なものであるが、また眞宗本願寺派の學事史として前田博士の名著と共に高く評價さるべきものであらう。

然し本書のもつ價值は單にそれだけではない。近世宗教文化史を考ふる上に多くの資料を提供してゐる。例へば宗學興隆の條について見るに、徳川幕府は法度によつて僧侶の世俗的行動を禁止して専ら學問研究に精進する事を強制し、以つて教團人の關心を内部に向はしめる事に苦心し、一度宗論紛擾し來れば直ちにこれが關係者を處分し、時には校舎の破壊をも容易に斷行してゐるが、此事からは幕府が採つた宗教政策の性質が明らかに窺はれよう。三業惑亂は功存が已が見解を以つて本宗の正當なる安心となし學